

いのちを継ぐ

● 詩人・作家

森崎和江

(もりさき・かずえ)

「いのちを継ぐ」をテーマとして編集室より、指定の数篇の作品にふれながら、私が日頃考えていることを述べるようにと求められた。私はそれらの作品を読み、体の奥底から小刻みにふるえてくるような感動を覚えた。子育てで自分育てを暮しつつ一人悩んできたこと、二人の子らにはやばやと巣立ち、いつしか親を見守るかの昨今となっているのに、なお日々自己へ問い続けていることなどが、高校生の国語科現代文の中に収まっているのだ。何はともあれ十代後半を育つ過程の少年少女達が、この四月から教室で学ぶ現代文教科書の全篇に目を通さねばと思った。そして全体を拝読。深く納得した。世代の別なく、今やいのちが直面している世界的な実態が、さまざまな分野の方々の短文によって多様な角度から示さ

れている。しかも相互に呼応する配列によって、その流れは成長過程に対してあたたかい。私は改めて、指定された数篇に向かった。

評論「虚ろなまなざし」

岡真理のこの作品は、スーダンの難民キャンプと通じている炎天下の道の端で、飢餓の果てに力尽きたように小さくうずくまる幼い少女のまなざし、その「虚ろなまなざし」をめぐる思想性ゆたかな評論である。

少女の、そのまなざしは、南アフリカ出身の青年カメラマンによって、背後に迫る巨大なハゲワシの両翼ひろげた瞬間を写した一枚の作品となり、ピューリッツァー賞を受賞した。そして「先進国」アメリカの茶の間へと届く。やがてカメラマン非難の大合唱となり、彼の自死、という事実がこの評論の素材となっている。くりかえし読みながら、私は今の日本の高校生に「虚ろなまなざし」を想像させる作業は本質的には困難だろうなと思案する。が、この私の反応にはわが幼時期が背景となっているのだ。著者とは時代を異にしながら、その論旨に共感を覚えるのは「虚ろなまなざし」の記憶が、戦後の私を自問へと歩かせてきたからである。ここで私事にあふれても無意味なほど、(まさにこの評論に書かれた一過性さ

ながら)消し去った「東洋平和への聖戦」キャンペーン期に、私は現韓国の大邱^{テグ}市で内地人の子として生まれた。十七歳となり内地へ進学した。戦局厳しくて文科廃止となる。渡海前にペンネームで雑誌投稿などしていた私だが、小学校(母語子女別に制定されていた内地人小学校)への入学前後から、どこからか射し込むけはいのようなまなざしを感じた。なぜか、幼い少年の虚ろなまなざし。米と麦との区別がつかずに父母に泣いて尋ねた時も、そのまなざしが浮遊した。やがて五月の或る朝、父に誘われて散歩に出て稲苗の束を受けた。庭池を田として「これがコメの赤ちゃん。泣かずに植えなさい。誰も初めから知っている者はいない」と父の後ろから苗を泥へ植えた朝も、あのまなざしがあたりからこちらへ見開かれていた。これまで私は幾度となく、そのことを書いた。生き直して、あの大地のまなざしへ詫び得る私になりたいと願って、日本探しへと歩いた。

しかし今回の反応はこの私事へ傾く心の背を、はっと伸ばす。今十代後半へと生きる世代こそ、体験の次元は全く異質である。しかし、飲食へと固定化した先進国内に生まれ、大人世代の無力さに閉ざされた幼年期に、幼魂を孤独にかかえていた子どもは少なくない。私の心に刺さっている小さなつぶやきがある。それは、ぼろりと

こぼれた幼児のひとりごとだった。「今地球は病気だよ、なぜ大人は知らないのだから、ああ、また木を切っている……」。この丘を拓いて新興住宅地は増え続けていた。幼稚園の周りの丘も。その向こうの丘も。チェンソーの響きの中を孫を園まで送っていた私の横で、ぼろりと洩れたつぶやきだった。数日後に幼児と遊びつつ彼に尋ねた。いずれそのことはこの小文でふれたいと思う。いつの時代であれ、幼児のまなざしは大人へと育った人間社会の偏向に阻まれる。それはいのちの声として私の心に重い。飢えて虚ろなまなざしと重なってしまう。

異質の他者として隣接する存在はさまざまである。それら身近な他者、隣接する民族、その中でも虚ろなまなざしは絶えない。日々、自問の旅となる。私とは何？ 生きるとは？ 表現とは？ と。せめて隣接する異質の他者を受け止めるエネルギーを、いのちへの愛の根っことしたい。

評論「病と科学」

著者の柳澤桂子は生命科学者。最先端の科学と私たちの日常の相互性について、病気という側面からごく普通に暮らす私たちへの、この伝言である。病気と無縁になる事などまれな私自身への言葉と言って過言でない。今

日も私はやがて病院へ行く。そして医学的資料の一片となる。献体の思い。医療診断機器の進歩は病変部の判断基準を高めるのだ。が、私が今日何う病院は、著者の文中に込められた視点と通じている。「科学の限界を考え、人間の限界をわきまえて、謙虚に自然と向き合う姿勢」に立つ経営がスタッフにもゆきとどいている。重ねて私の主治医は自然体でユーモラス。素人には理解がとどかぬ病名とその標記は学界用語。しかし「検査データが人間の体の状態のほんの一部についての情報をもたらししているにすぎないということ」を忘れない。

が、世界はグローバル化の時代。私の主治医の思いは、食事を作る私の日常の不安定さとも通うことだろう。食物の素材さえ細胞基盤から激しく人為化する時流である。人間の、毒素を調理して家族と食べ合うかの不安は私に、食べる事、生きる事を問わせる。そしていつしかわが体内自然と私という存在との脈絡を考える。普通の生活者の多くが自然を思う時、心に描く対象は極端に狭くなっていくのだ。が、ビル内家庭で生育中の少年少女達も、親離れの頃には、体内自然と科学との関連について何かを感じることだろう。そして自己管理の困難さの中で、生命科学の先達の言葉を噛みしめる日がくるに違いない。

生命科学者が私たちへ分かりやすい言葉で科学と人間について書かれた著書は多い。私のように戦時下の学徒動員で結核に感染し、戦後の数年間を薬品なしの情況の元、隔離入院できた者は幸運と言えた。その体験中に、病と科学を、この評論の著者の論旨に通底する姿勢で患者と向かう医師に、私は出会った。若い医師だった。日夜療養所の個室の窓の下を、戦場帰りの元兵士の柩が通った。同じく患者で、寺院出身者の低い読経の声と共に。療養所は広大な松林の中に病棟が点在していた。その中の唯一の女性棟へと廻診する医師の一人が私を短い言葉で叱った。「学生時代に結核に感染するとは当人の怠慢です。昼夜窓を開けて安静療法を。のちほど薬を届けさせます」。やがて数冊の医学書が届いた。自然治癒力と医学に関するものだった。粉雪が吹き込むベッドでの高熱さえ心の支えとなったほど、視界が明かるんだ。

この安静の歳月は後年、発生生物学者岡田節人著『試験管のなかの生命』をわが新古典とさせた。やがて柳澤桂子が病のまにまに生命科学の研究を重ねておられることを知る。著作にふれた。また同じく女性生命科学者中村桂子の文明観にふれ、三者に通う生命への愛おしみに共感した。

今や一般に死は社会生活から見捨てられた感がある。

死は情報にすぎないのだ。が、情報処理としての死は生きていることを問う力を薄れさせる。この著述で著者は「苦しみを受容する能力」を「自分のものとして受けとめて」こそ「自己決定という考えが成り立つ」と記す。

評論「聴くということ」

前著述の二篇が、学問研究の立場を日常生活者の目で見つめた論旨を個性的に述べた評論と読みとるなら、鷲田清一の「聴くということ」は、ひたすら日常生活に思索の主体を置いての言葉として私に響く。

その言葉は生活用語で分かりやすい。「聴く」というのは、こちら側からの選択行為でもある。けれども選択的な行為である限り、「何を聴くか」というのはたいへんにむずかしい。それこそ、私の心に刺さっている小さなつぶやきのように。聞こえたが、聴いてはいない。大人達と挨拶を交わして歩いてきた私を、そのつぶやきが自覚させた。

一方著者は語るほうを大切な対象として、思索を重ねている。そして、聴くという行為の中で、私たちが日常的に誤解しやすいことについてふれる。それは「相手のことばを受けとめるだけでなく、（ ）ということなんじゃないですか、だったら……、と解釈してしまう。こう

して話す側のほうが、生まれかけたことばを見知ってしまふ」と、実にまっとうに。

そして「聴くだけという受動的な行為がケアにおいて最も深い力を持ちうる」こと。「他者のケアとは、他者のセルフ・ケアをケアすることでもある。」と、伝えてくれる。

ほんとうにそうでした、と私の声が聞こえてくる。それは子育て最中の私が、とある事件のかたわらで傷つき、心身不調に堕ちて寝たり起きたりの数年を、ただ聴くだけの心身として他者と接していた時への、追想の声だ。名も問わず泊めた。だまって話を聞いた。後年のこと、心のケアやカウンセリングの役へと読者を名乗る人びとに追われて、聴くということの大切な機能を知った。おそらく時代の流れが文筆で暮らすほかない私にもその事を教えたのだ。

この評論の著者は哲学者・論理学者である。むずかしい学問分野として私が素通りした学問が、こうして煮炊きしつつ文学を綴っている茶の間兼炊事場兼仕事部屋で、出会おう。いのちの営みの自然さながら。目がうるむ。

評論「未来世代への責任」

岩井克人の文体もやさしい。「私は経済学者です」「現

代において数少ない「悪魔」の一員です」とある。白状します、私に何よりも不足しているのは数学への理解力です。やむなくそれは食べる学問だと思ってしまう。

「おばあちゃん、おばあちゃんは年寄りだから知らないでしょ。今地球は病気だよ。あのね、鳥がほろびるの、ドードーって鳥はほろびたんだよ。おばあちゃんは昔ドードーに会った？　今までおばあちゃん何してたの？」そう問うた幼児の問いと同じように同時代を生き合う、いのちの学です、と。

私には経済学上の論理の理解は困難でも、一九九七年の地球温暖化防止に関する京都議定書の採択は知っています。心にかかっています。著者は記します。「経済学者の論理が作動し得ない共有地」は「未来世代の環境」であり、京都議定書はその現象の防止対策。が、「未来世代とは単なる他者ではありません」と。「それは自分の権利を自分で行使できない本質的に無力な他者なのです」と。

私は京都議定書の批推を巡る混乱下をそれと同行する大人社会の成長方向に対して、今を生きる私の個としての責任を感じました。私は今の社会の一代主義を越えたいと願っていのちを継ぐ私たちのエネルギーを社会的父性・社会的母性へと育て合うことで、未来のいのちをそ

の環境を想像する力を社会化したいと思いました。書いたり話したりしています。

その私の、書き損じた原稿用紙の裏に、幼児はクレヨンで描いて私に尋ねたのでした。丸い地球の絵を。(なぜ丸いと知ったのだろう)。「おばあちゃん、今まで何してたの？」と。そして、反射的にうめく。悪魔和江と。

私は書くのを止めて、幼児と戸外へ遊びに出ました。やがて彼に尋ねました。「幼稚園で習ったの、地球の病気のこと」「テレビが言ったよ、何べんも言ったよ」。その情報通路は私の京都議定書その他の通路と同じでした。しかし私は地球について、聴いてはいなかったのです。知識として知っていましたから。知っていると書いていましたから。著者は記します。「京都議定書の批推を巡る混乱」は「自己利益の追求を抑え」「倫理的な存在となること」です、と。

この文章は二〇〇一年八月の文章とのこと。私の心に未来世代へと生まれやまぬ子らのつぶやきを宿らせ、セルフ・ケアの数々の文字や言葉を残して、孫が、自分探しへと旅立った当時の評論でした。

小説「みどりのゆび」

私へ指定された小説です。作者吉本ばななは若い世代

の代表的作家です。この一篇の巧まざる構成の、魅力。私は小説は若い頃に二冊ほど出したきり。体ごとの表現へと私の用語がなり難いことに、つまづきました。母語としか言い難い植民地用標準語しか知らずに十七歳まで育った私は、内地留学以来苦しみました。日本には私に理解したい方言を母語とする日常性と、教室用語としての国定国語が、見事に所を得て機能していました。戦後、列島社会の地殻として生きている地方語界のいの中に会いたいと体が動いてしまうのです。方言は細かく地域毎に異なります。それを生活共同体語として暮らす人びとの体の声を聴きとりたい。北は北海道から南は沖縄の先島まで、私の永い彷徨が続きました。

小説「みどりのゆび」は『体は全部知っている』によった、と、著者紹介に出ています。両者のつながりが、人の形を失うに伴ってあたりに匂う香のように、祖母のいのちがはぐくんだ愛として、植物・生物のささやかな分類を溶かし、畑中の細い坂道を行く孫へとささやかにけるのです。さすがは、ばななさん、と私の心がつこり。筆者ばななの由来書なのです、この小説は、と、勝手な空想が広がります。

もし言語表現に何らかの力があるとすれば、読者に勝手な空想をさせて、その連想が生命界つまりは自然界

を輝やかす時にこそ働くのかも知れません。いのちを交わせ合う小道作りのように。

それにしても著者が感じる「だれかの気配」の幸せなこと。私が幼年期から、つい数年前まで感じてきたあのままなざしとは、なんと隔っているのでしょうか。そしてまた、死の匂いと「永久に生きると思い込んでいる人々の声」や「色の洪水」の、両方を往来しながら「小さいころ読んだオルフェの話の思い出す」著者の幸せ。私は古事記の中の生者と死者の腐臭の分別が教室用語を支配していた意味に、長い歳月苦しんだのです。ほんとうに、別世界のようなです。そして祖母を家族の核とした日常性の描写が、さりげなくそれらの敷物として生命界を守る構成の、見事さ。

私に著者の感性が響きます。アロエを介して綴られる表現の匂いのように。日常性そのものの微々たる存在が持つ生命力。自然死に潜むいのちの連続性。私に父の言葉が浮かびます。死を前にしての静かな声でした。「いのちは母の胎内で十月十日とつきどうか養われてようやくこの世の者となる。いのちの終りも同じほどの時間がかかるのは自然だよ。君はおなかの子を大切にせよ。そして凡庸に徹して生きよ」。脾臓癌末期の苦痛から、一瞬目覚めた秋の真昼の父の声でした。

——とところで、この小説の象徴のような、家族が囲む小さな四角のテーブル。そのテーブルを囲んで、旅の私は遠い昔、幾人かと茶を飲んだ気がします。部屋の片側に二つ並んだ机にぶらさがる女の子のカバンから、朝やけ空の気配が輝いていました。

●森崎和江（詩人・作家）

1927年 朝鮮半島大邱生まれ。

作品に、『からゆきさん』（朝日新聞社）、『二つのことば、二つのところ』（筑摩書房）、『慶州は母の呼び声』（ちくま文庫）、『北上幻想』（岩波書店）、『いのちの母国探し』（風濤社）、詩集『地球の祈り』（深夜叢書社）などがある。